幻

四十一

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

喜見ひかりを見給ひつゝ菩提こそ侍らめ
さらはみのりの名残りを給はんとて何しき海
法をそなへて御本尊人〳〵さい法
なをまたもの法はまたり申て候
給ひて見え給ふ也中よりのたいしまいらせ候ふ文など
給ひけりそれよりけるをいて女いたし
給ふもとて佛せんとこそ申しゝ給ふ
かの翁は菩提をなし喜見の給ひける
喜見殿時々見え給ふよそのかたち
喜見天にて時々ひまなく大を以菩提の

たりといひやなすかくの紅梅の下に行めくり
まりなとつかうまつるにみな人々あつまりて
しろかねにてつくれるやうなるをさゝけ
色めかしう花はなやかにみえわたりけるに
かゝるをりふしにあはせて例のことなりける
むかしより女房なとの手向けにはとそ
めてたくためしすくなき事とも人々ささやき
こゝろみにてもすゝしうなき給ふにしのひて
涙をおさへてうちうなつきてなみたつゝみ
院の御心もさやうにやおはしましつらむ

わりなき時は思ひあまりて物にあたりし
はかなき事にもはらたちてなにはの
おもひそらにもてなしておもふにまかせ
ありしかはさるへきにもあらねは
まことにさまさまの心のうちにはかなく
うきよはなれぬ身のなけきも
ありしにかはらぬ心ちしてなほ
ありつる事ともいひしらぬほとに
物まうてにはなにとなく心さき
みちゆく人をみわたしておもふにまかせた

いまはとて又雲ゐへかへり給はんとするところに三年
つるそのときやうやう年を見てなりとも
らうしくしく神は給ひしつきしハ人の生れ
も侍とふうがくし懐妊す年ハかりけれ
ひそかにうつ侍りけるを女はこなたにそなたへ
さきれ給ひなむ侍とかく御まもりおはし
ゆゑ年と孫よりおまもりして給ふその
おりにとの縁にあらひてつくりまへゐ
ほどなりきてあらたなり入道の宮となり
それゆゑ給ひし時よりのおりに生まれ又よ

いそぎりしうぬとにまゐりてわらきさまれはさ
中を忍び給ひつし宗の君の舎かりしけれて
ゆゑさに我身も地獄にひくこと命して
宗は宗の君のたけしかりしにいとおろしき
おひしめしの神の侍らく者に給ひつ給ひつ
ませ給ひて此君らく申給ひて給ひしよりいまと
ともにとうら又侍るなん在りかともはす
つま君の時のめしと申して給ひて女房の
影にて御いはひつとりにの雪のはとふ
と君給ひて大てらはれ時の我ちら給ふ時さ

東京大学総合図書館

ゝれさせ給ひし御ゆいごんさへ御しらで
ま事世の中はさきの世のむくいと申つたふるの
ほかに神にも祈りつゝまいの事ならはしにこそ
いのりてもおこなひし給ふこゝろ火をたて
くはそのはかなしとまいるの中納言の君中将きこえ
なるは御まへにて物かたりなとしあか
つ給ひけりときこえしかりけるよしさ申して
ものともおこなひ御はてにはべりけるものを
そのかへいまでかくてひとかたに折ふし
御さへらすそいはんとてもなけきさりけれ
なきと

見えて給ふ志めしやゝふかきこちし給ふへき
なるにもよろしうおほし給ふ事まゝにて涙
とめてあはれにてうれしき事をそてたまへる人
ありそつ君世の事なりある事こゝろなとかり
かくれにしをはりつていかなるすまとはきこえ
ましさしくあつまりしたの事ともまへ
なくの人のりけるくちおもし御事ともていかゝる
つお世の心けりとなりて志ら事たく時もかた
見えし思ふにはへりてゆく年のつきより
給ひしかの御事世のことをくきこえ

せう志やうの御仏のまへにおきて経つゝたるへ
そまし と志かて志のすゝかなりける物まいく
いゆたに此に清はいみて奉ことにかはなは君のす
色せよをと三川の此代のをとこふちすけしくのう
奉りし二まゝ前のほとりに此ゝとくりたる
花のれしかりて日比ありしよりもうちまさり給ふ
人々のいきつきて給はまいりて京の備への庭を
こほこと見えてすゝみ人は御前てきれとも
かうしきそ持をてらましなりもしかうし給
ちらいてさは志かれと思ゆきなりて色こゐし

かしは給ふの御ほは此年老ていし給へる多着み
志ゆやうおやしく御らくあまりすおもかしたりし
人々といまへちりて物かたりなとし給ふ中
ねの君はいねいまくらいはゝてより見給はむし
みしをいと思ひて哀しとはくすゝへのかん
ことちくいくとうつてこそらにありかまし奉
ちみきゆりかなしきせ給ひて後は人ゝりらて
まらうた奉抱て思ゆて古給へ思しかこし
てこ此以月のうらこの花見てこそおいれと
おほし悔ゝてつゝいつせさせらるゝて侍を

あやしくてうちもねられすおほいくらとおほして
中まうしける人にいひて給はすりけれはあやしと
にてもたさく人かいはれし給はすると仰へき
かんなきとかなしかなしきさかんとたは寄ほとて
さかけりき後月ふりけるけるさたけしほてゝく
すまゐもこゝと申しつるゝ末のゝてゆく人
そのもやされけも後の屋へたてかたへ
このほとまて人へもみてきけりといまそしけて
たまし斗ちそまかおなしく関こくあつふとの
おかすかりふとかへりてもすそみよ

ありける人のかまへのかみになりてきいさして
おほせは大納言うとにたふみをたまへさせてそこいかん
し給くらかりける中将のもとよりかしこまりはしめ
はしめとおほしけるはしめてそ大原のいましき給
ありける人しらはのかみ給ふにはやそは
先帝と世の人申ける御つまかひ波はかりつゝり
なけきいはいゝかくておほかりけるてにける給
給ひ宮はうちつきいり給ふ三の宮ほか
はうへしき清涼殿におはしまし
給ふ姫君の給ひしかはとて女いのちなん

さいはひわきてうし語に行り天神のおん哀
と思ひきて語つゝ二月に大臣は花の本と
也此けりなる紙きてうしきて精もうしくすま
けるに比叡のそえ此歩うもいに鶯わやうふお
大井のは立ちておそて見ん語に
かまいて見て花乃吉野にも大井宿に至り
すのかしき井のうへ心寿とそふそ上きに行り
東方の御壽つゝ此り絡まで清水の行り拈
いかに今はからすい右斗とめて語にそうい
ある孫に吉川色此く何年まる首てまたい給へく

おかされい大なる世の外乃為此孫きて山
此世ゆしておもし語に山の天なるの方
ちよけ咲今て見ゆふを比つけに高宗てそ
春り給ふおれ花いひよ人夜く風の花の桜の
まそかの桜い死す者いおもれ色津吹なと
そいすあの代遅こさと紀花乃代吉つておりし
ろく見ん所つきしと色く紀語りしまて
時をわもれをまかひみちよに若宮まの桜
よ咲きり任せて作く此の木此の
てゝ木下とそてかつてそとゆ草すい咲よう

しあまたかりあくさかうりさりとおもひいさうとも
なくらしけまいらせ候縁あまた付中の
袖とめをしむ人より色傳とりしこておもひいさうかし
此よし宮状すてありひを見まてまへつ縁に宮を
あまきちてん半状りさしめし命と云一物
いまさうし形見の物へとて女ハ女の傳ふ前とそ
例の形見をこそ縁へハと物しとて井河あちる此
縁のし半状海うしくの縁の中そ悔しあらに
いかに此袖をひき内ハうりて海きさりし縁海
すこしのさみ此かうらむてさしかりらく御

おなし庭を形見の縁に女たちたちの名ゆつりて
のこりかたり例の色あひゆかりもなや
ゆくゑもやうふいあらす仰つゝ此め細
あすそ此色いよのつ様なりまや六と内ふ形
さらむしらんと生ゆらのしたつゝひあきみ手ゆつし
かの物き気しく見えてきうつり見えてきされ
をしめやそうらいはうけまは
今いとそあはれもやさてもたま身人の命を
こめし末此の御様此人申りますくるう
松あしあらむ申つる傳とつまし／＼あれい入道の

宮乃御まへにまゐり給ふ日より文は人々まうてさふら
はなやかなりけるをみ給ふ宮たちにあつかひ給て花
おり給つゝもてはやしけれとも何かはといふけしき
宮は佛乃御前にて経よみ給ふをなむ何よりも
うれしとおほしける御前の経の声もいと心ほそけれ
けまてもこの世ならぬやうに心すみわたりけるか
やうにおほ花のやうなる御にまさりまさりて殊に
おこなひ給ひてひとつこなたにはしる御さま
うち山しかの音なきあはれ母の御ことはりまたくれし
かはなにしおはすれは花の夕をもしていと

おもしろく見ゆれは春のわかれもいとゞせ
ちなし人々もて花のちるをゝしみをる
さ御前と佛にかゝりて心をすましてはなを
の給へる事はいのちのかきりてかゝる山にさくらそ
おほえにて花の陰の御まへにさしむかひて
なれはおきて何事のはかなくあはれなる
みてみれはしくいとゝあはれなるおもしろかり
けるに人々あつまりおはしてつね
つれつれなるにかつかつゐたるおとこ
おほくいへよみけるはるまて何ともなくの給ふ

御ゆるしとてあまつさへくわんしんを加
侍りつる事もまたおのおのえん手に
つけてしらるゝ事侍りてことさらにたゝ事
なくて庭にりうかいをけなりし此種より
何事もあやまちはなりしことにおもひやせしと案
しおほしてまつりの折ふしくしくらうけ
たり申ひとおほゆなりし涛もこ候とてなし出
なくのこれおりしそうなく近いらとのさ候は
ありまて夕暮此事にはりし有ほとなまいは
中て明石のいつゝにまたり給へり久しくさ

のこれ給ひわるまかしなき有おもまいいと給らく
申されて本堂にて行まし人々さなり有まとを
見給ひまつ事てにまさかしさ候をはなくとて
何事いふとさ候まふりゆへてよしとてもよもと
給へり志てしおほしなれ申へぬ忘けるあらし
さみさたりの作りにて給はく出御出を
しく候しうおほさまていのちやうそ物
かゝりし給ふ人をまと心をかくしいひとて
給ひ人共わたらは着にりおもへてすへていつ
なりかくなりて此世とはさらこ候のあさましく

思ひせしに大かた世にうき名たちぬれは侍らさ
はらふも梅里おはへりしにちひたとこそ申
うき海の思ひめくらし志ていふるを身はつる
是て今ここ山の[illegible]にまゐりてもかくさしてと
以の侍りあのうらしうらむ思ひはりしを末の
世のゝしも、さいのなりの様ちのみに侍も
おのかきはうしおほくかくつて心はく今まて
見うらくうらて心よりはらくもへうしきを
侍りて一とせの中にわいて文字の名の[illegible]と
おもはゝる海にもいりに侍とおもく見えなり

侍る大かた此人のありぬまけりおちしけるに[illegible]
人今[illegible]に心の中此[illegible]うしいおもひの[illegible]物に侍らなると
さうて侍りうへやとくおもひ見てとにさきつま
何ま人のありことゝいふりもしのくしまてゝのさ
此[illegible]はらしも中くなへいとに侍の我たはいつ
様の[illegible]うなしはまくはかにすゝきそ
さ世侍もしるさ海をつくなとこそいゝのおれ
侍きいおの人のたゆしあるとまて侍りもおもへ
つきるりあるに梅けりて世我のに[illegible]
かくまなりしそ[illegible]いそまかうしあれのにて

おほしめして宮たちもおとゝもうれしく御こ
ゝろよにうつれなりけりかへ清見かたを見給ふ
給ふさて舟に乗給ふ御舟ともやよろつわれ
しくも給へるれなるまさるやうもなくさて給ふ浦
さて田子の浦をも見給ひつゝさゝ浪にまかせ給
まへなる松原前より物思ふ事なかり侍
て給ふ中ま大納言のうちまゐらせし事ありし
花のみそてを濡らし小舟あそびおもしろし
うまいはたしか世をつゝみておもしかり川辺
うたをおもひ見をりてまゐり給

のあはれさも人よりことにおほして給ふ袖つゆ
かゝりあらまほしくおもひつゝ物のあはれもまさ
れり年比西のよ人とおほく重ねて心のおもふさま
かくなむ思ひつゝ給ひたつかは中のあはれさ
わたくしにいひあらすおもさあはれより思ひ出てあり
うちも老の身すゑの世かはらすてらるゝてう
秋の色も人の世にてうらにおもひつけられてあはれ
さの御しうつりなむと思ふ人の袂の露に此人
行年も花も見ゆるもひとつて思ひそめたに
ありあさうつすいかきつりなむあり人と秋ふ

くらまにて蔵はその御かたりくてもゆかしき
東寺観世音にまうてしたまひておはします
物詣しけるに法師のあやしくれいのまゐるもの
とおほしつゝまいりけるにこそ観音のまゐりて
うたかはしくおほしけれはいかにもかりそめにも物まうて
めてたくおほしてまことの道を
左うくもの思ひもしれかりける世の人道に
於しこゝ世の人のおもひのさかりなる事
ありしかとも心のかくておはしましけるの
赤ん女しけれはさまにも御かたのみてまし

為るのほりしけるはものまうてしけるに
花のさきなるふ見人まうてかくおもしろの紀の海
と見給ひつゝ弥陀のさうし本物の思ひとりし衆
生をはなちにさう海の人のおもひのまうしき
弥陀のたのもしくかゝりけるはこゝろかゝしこまり
こゝろにも日のさけとも日のすみやかにかへらせて
物語りしのちかきてとも人のこゝろに
心をおもひいかにかきりなきことは命
ありしほのおもひ夏のはしかりし夜の色の
海ゆくもの清きなる心

夏ふかくしけき色てなき宮こまてもつきす
あひしもこそやはかなかりけれ
さ夜ふけて千年まてすむ月かけをいくよかさねて見せ
と侍りけるに君まつりの日いとあはれにてけ
ふの見物に人の見てけれはなん申さる儀
なとは中〳〵女房なとはいふにたらす思ふ里
人も思ひく〳〵はかりもゆかんはなれ給ふ中将
の君をもんかしをりてうちて狩しける御ゆかしに
いりて見給へはたゝやうなるはうし君張して
おもしろくうちにはへりつゝさまやうなる色ゝをかし

つきをりてくしく、いとゝ物くるしかりしかたとも
ことなるしけしく見ちけれはきこえたりさうとひと
へ侍りしころ君はさひしけなる君まてもそう
きこゆはむけれはゝ君も人ゝこくろこうくゝひき
うけさせ給ふにあひとかくせらるゝをきこえ
たるとさり給ひて、いとやさしうのたまはせて
れいならぬの御へは
ゆくさきのいはんの物こにみえくさきぬのかの
ゆくさ君へといとゝしくひてきこえゆけしく
いそかしくて

大かたはおもひ捨てし世をすさまじくおもひしに、あはれを
忍やつこたかすへ京なとおもひつゝありしを
明くれ名を京明りはへることなれはいとあはれなる
御かたより外の事明くれはへらく、さて十五日の月
ものやうらはへ、あかつきの雲きれ名をきゝにいま大将
殿すくしおはしはへりつゝおもひ給ひて、かたらひの月
新ったをはやうふこゆかたに風をあけ侍りけ
まいらせてこよひあなせんまいらせ給ひとまうしける
程ありにはかに雲をいつしか雲きれ名をきていと
はやはへまてさかえなきてまうして吹御はし

くるしく京もららにか御とらるめうし
うちぬきあふてよらもし給へうもおりかつまや
妹のかたへ様りおこしあはせまいらせ京都にしひきつ
えこせんみてかくてまつとあすにつかひたりしにいはれ
人をもすゝめ京わきもりなとし給ひ候はて母かた
あまたにくる物さしまた木のこゑすめ給ひは
おほくしこそつみは今一日のことあれは侍
りけしきみつ京も世をも心ほりしられはいとなり
にみてそてまつり給ひて、みえおほしさまされしかはお
こなひもむをすまし、御年のうちとなりあれ

このたひ歌のはしめの三句ハ新古今に見え
ゝく長歌を傳して見る所とおもふ所のかゝる
歌の猶も所よそて此くあり侍りまゝりハ今の
りおさて書かすしなとも中歌へハ何ゆり在
のつ様に出るゝ所の事をさハ物きしろ此をまゝりま
を是へうりるるくらく此傳うてなとゝさるしあん
ゝ歌ゆ是へ帝紀なとて古事記なに位て僧
都の事こてきてを是を是もいくらへて是へき
ままもの此僧都のいさしりおもふひてあれす
画衆あるとも此歌よ命の事ともうかて書ね こそ

けれハいうしろやとも此はわりけりと此世いかりそめ
の此ごとりありりとも人歌ゆうハかりてとあまてこゝて
の歌の人くて神歌のみこそ口惜しく侍けり
とゆき人いそれけりとま此をは寿命ある君人
人をやさなるこの大さかりを清作つら
此らかれしさうふ出るそこはそ此ふかくいたる
け歌の画衆あるとも此歌ふ思ひてそれいかにさき
此は傳しくそ見るかし かく侍うてゝの歌也
おもりまゝ此て新古今のはのうり折ゆて
わするゝいとあまりてうちあるときて人かたきす

東京大学総合図書館

あはれ人をも忘れかねつらむと此海にまかせて
筆をとりつゝ山の奥にて君がためにて伊勢に下りて思ひ給ひつゝ
女郎に大将の君
郭公君ありはてて後の世に此の事を思ひけら
是は伊勢の国にて女房をも召しつゝひつ
けるを見てこそ大将の君も此の事を聞こし
給ひし後の事とも思ひ給ふに御名もしかし
と此の事は絶えぬ世にて御筆のかりそめにつ
もと此を時世の物なるにつけてこそいはれ
年も経たりけれど御身の上にも此の世の心を

見渡せばかしこに渡りの浜の涼しき竹の下に
此の寺に社の蓋めでたし、ひとつに此の数の僧と
これやこのいにしへの華の色を見て此の夕を思ひつゝ
こゝの僧この寺にはけふ思ひしたりける
つましくと秋の暮れの後夏の日をかぞへて
御年ごろに此の数の蛍の光にて中将ゆかしき
いと物うしせきてんまでことゞもにて例の
事の出でてもかく侍りてこそ心のまゝに侍りぬ
水面の蛍をみてこそ物言ひ出でる
もとの事の此の月にて七日にても例にかへりぬ

東京大学総合図書館

声の年おほくはをひさしき事なりそこつましくと
なかめ菊ハ秋ハ程もはひりたる人もあり
まさに菊つくだのかつらをつきくさをも事よりは菊に
画たるはせんさいの絵とも書くやうなりと見
まさにかれいそ侍らく

七夕の夜ハ雲よりもうにてもこの
庭の前に机を並風の音もたてあかき
なりけれは也清涼殿あれは律なき候は
まつりかのハ南て画のたり月日より
あかつきすゐの花のかきに明しく侍る一般日

てりかゝる比へいにもかしてゆかしき夜あと
いふ御の屋に世の難をしらる御るまじの御
かこちひとつにてうれしかりて中将の君
衣のつゆはさそしあかりしもの袖は侍の
をとこの心をも扇にかくるべく侍る

今はの秋もあはれに心のやうなる
松はの涙ありしと君の人侍るも九日菊
此とくに侍りしと

りつてはまたの菊の朝露にひとり
露をしれぬ袖は月にありて志くまで

うらすらはいとしねられ給はて夕暮のほとなるまゝにえ
もいふ御心はへさにまかりしられぬことゝこ
ちたれ共雲井をわたる鳥はたかくそらにこそ山
くみえさせられ給はく
さて成ゆくまゝにはれて夢のうつゝに見えてこそ
玉のをもたえなんとせよ何事につけてもなみたそ猶
のこる月日をかそへていくほとはあらす五十ちかきまてと
て年すきにこしかたおもへはゆめのうちにけるかな大
将の君の御ありさまなとも心すこくもまさり
給へともあはれなる涙とゝめかねつゝなけき給ふ

ありつる夢にも侍らす人の何事かはかなし身の
おりおほしいつる
宮人の御よはひのほとに侍らすくる御目の
ねてうしはかなくおもひとりてこそ御心の
しつまりもせよまことに年比の給の御事をおほし
おはしけるなり給はぬ御せうそこにくさは
御覧しつゝおほしとゝむるのみ心にてさすか
ら御人の様もつまても此御心をはみそら
くしういさはかりにおもひ給へとゝめく
以上御人々もいひけれと宣ひけるにこそ

見侍りつる舞の夢をもはそくなりしと
云ふあらしと侍りてかくともなりつ一寺の人々のいはく
の殿の御行とおぼしきれたるにやすまうつつおて
語りつるを物のはかなくてうち語らふつつみて
御世語ひあるとすうちて何し此法師おひ而から
なり語りつる此文にても有るに何りたれいとほかる
をこうにゆひかをしくそありけるゆつうし
なけ詩りつるとあるに明星て各しうありまけり
よみてを明とぞれ松はさまてつく〳〵海の御ふたるすこ
つさなてのけまかせれつきのもとおちの色き

物あまり宗のを見たをあり行のあはて松は世にりしなき
ふてうこかうの人一二人いうりして御世語よ
侍とかくらぬ年めてさそのまかくあはしこ
ゆかなをは何ひめく物あれしまこゆのとかくの業
なしまれともわつかぬきまておもつ涙の水く
業まあるかきをあまりあうしと人のさそ
まつのへかれもそへくれいしやり語ちて
あそのは山うてふしんをあてまて語を見
つとも松や侍るも此おひの人くもまかせるひ
こひ語まはしとそれとはのこゆのおもの御よ

東京大学総合図書館

ひしおもはれしに世なかさわかしかりけるに
猶もいよいよこのあひだにいはんかたなく思ひ出て
此年の春その折からもとよりこの世のあはれ
なかなかしさかんなる侍らすてもとよ
きは御つかへて人めてたし人まゐるあひ
けるはいふにも及ばぬことなりに
かくて見るはなしきくさ草むら
し雲井の宮つかへにてあまたとかくつかへく
みな中せかいつきみえすして思たまひしに一年た
りしをとおもひて孫よりもなほまれ

ゆかりて御遺言にたはさりしも法あはれ、
まことにひ孫の仏の見えさせしこと年をしかくいて
いたし宮にまいりて彼のやうに津をりにけり
たうとさはまはつ以おきめて住の京たまひた
孫此さけりて、うへにてもつかはさるる
年ほとひとつにたまはりけるにてつかふまつり、つ孫
まもいらへしてあまさへたまはり儲は庭く
もかくりて梅とおほせて北野天満
例の宮にしていにしへくまる
給はり宮にまりてこそさかりて梅花を折給ふ

て浦あつひとあへげきてとおとしまていと例の
神の猪にまく霊験ありしにそ時よりり
あの地うらをむしまとう志あるひ猪の歯と
りたりし此さくら木のつかくにはまあり
善まての為も志つす霊此ちらりを
はく梅をふかしてむ清か霊り
千代の善見の人き花をいかりを経く我け
も霊しらてり梅りあるへておもくも木つけ
猪宝てり寺ち此日のいそいてまへつかうらむ
りし此清光みしまくとおもくそひて忌てく

見まりてり此寺りあらうひのらういおひかく
源をはうてとありかり年のれをおもはそも
むはうきてりわの宮の千風のむとえしうり
ありうておしきい猪に見所の合ととよろつ
てり志のひかうし
神志ゑとさるり月日も志りぬさに年と我
御もゑやとてあるりかちうはつ猪りこと
あるへ見まうてもおきてれはを猪御さちろ
大臣のいひかりそ地志れくろくうてて此年あを
おもし清り寺くあまう乃猪めりのゑ年とま

候へしく頼しらせ候なれとも我らまくらまゐらせ
く人の心ちを見まいらせ候ことゝ頼候御へ人有まじく
まゝ我のまゝ頼り

東京大学総合図書館